

称号及び氏名	博士（言語文化学）	花村 博司
学位授与の日付	平成28年3月31日	
論文名	日本語の会話における話題転換	
論文審査委員	主査	西尾 純二
	副査	高木 佐知子
	副査	張 麟声
	副査	野田 尚史（国立国語研究所）

要旨

1. 話題転換の3つの型

この論文の目的の1つは、話題転換の型をあきらかにすることである。隣接する2つの発話間の関係に注目し、その発話内容のつながりから、(1)～(3)のような、新出、再開、前提提示という3つの話題転換の型を確立した。

- (1) 新出型話題転換は、それまでに出されていない話題を提出する。
- (2) 再開型話題転換は、それまでに出された話題を再開する。
- (3) 前提提示型話題転換は、話題を継続しようとして、直前の話題とつながらない前提的説明を発話する。

新出型と再開型は、これまでの研究で取りあげられているが、前提提示型はこれまでに取りあげられていない。(4)は、前提提示型話題転換の例である。

(4) ダブルワークについての話

01M：おれはダブルワークってやったことないけども。

02N：うん。

⇒03M：あの一「沈黙2秒」やっぱり、うちもさ一(うん)、不景気で給料安いやんかー。

(8 発話省略。稼ぎが少ないのに子どもにお金がかかるという話)

12M：ほんなん考えたら、お金とかいっぱいいるやんかー。

→13M：で一、おれ、嫁はんに、あの一、真剣にさ一(うん)、なんか、その一、“バイトしてよ一”みたいな感じで言われてさ一。

(4)では、ダブルワークについての話のなかで、01Mに続き、Mが13Mを発話して話題を継続しようとする。その際、13Mの発話内容にいたるまでの前提的説明が必要であるため、03M～12Mが発話される。そして、13M以降も、ダブルワークについての話が続いていく。このように、それまでの話題を継続しようとして発話する内容が前提的な説明を必要とし、その前提的説明部分の発話がそれまでの話題とはつながらない場合が前提提示型話題転換である。

(4)の発話群は全体としては、ひとつの話題としてまとまっているようにみ

える。しかし、隣接する2つの発話間の関係のみをみた場合、03Mは01Mとはつながらない発話である。

2. 話題転換表現の使用傾向

この論文のもう1つの目的は、話題転換の3つの型ごとに、話題転換箇所に使われる話題転換表現の出現傾向を、日本語母語話者と日本語非母語話者のそれぞれの場合についてあきらかにすることである。

2.1 日本語母語話者の話題転換表現の使用傾向

日本語母語話者の会話における話題転換表現の使用傾向は、(5)～(8)のようによまとめられる。

- (5) 新出型話題転換では、終了の沈黙がよく使われ、接続表現はあまり使われない。
- (6) 再開型話題転換では、接続表現がよく使われ、言いよどみはあまり使われない。
- (7) 前提提示型話題転換では、言いよどみと開始の沈黙がよく使われ、終了の沈黙はあまり使われない。
- (8) 同時に使われる話題転換表現では、「あの」と開始の沈黙の結びつきがもっとも強く、前提提示型話題転換で使われやすい。

(7)、(8)のような話題転換表現の組みあわせは、(4)の例でも、03Mの「あの一≪沈黙2秒≫」という形で用いられている。

2.2 日本語非母語話者の話題転換表現の使用傾向

日本語非母語話者の会話における話題転換表現の使用傾向は、(9)～(13)のようによまとめられる。

- (9) 新出型話題転換では、終了の沈黙がよく使われ、接続表現はあまり使われない。
- (10) ただし、非母語話者による新出型話題転換では、母語話者があまり使わない明示的な話題開始表現の使用が観察される。
- (11) 再開型話題転換では、接続表現がよく使われ、終了の沈黙はあまり使われない。
- (12) ただし、非母語話者による再開型話題転換では、日本語母語話者によく使われる「えっ」という話題開始表現が使われにくい。
- (13) 前提提示型話題転換では、言いよどみがよく使われ、接続表現はあまり使われない。また、日本語母語話者に使われやすい話題開始後の沈黙がほとんど使われない。

このうち、(9)、(11)は母語話者とほぼ共通する傾向であるが、(10)、(12)、(13)は母語話者と異なる傾向である。とくに、(13)の前提提示型話題転換の傾向が異なるという点には注意する必要がある。前提提示型話題転換は、直前の話題を継続する際の前提的発話であり、話し手にとっては「話題継続」の意識で行われるにもかかわらず、発話のつながりかたは新出型話題転換のように、どこにもつながらないため、話し手の意識と発話のつながりかたが一致しない。そのため、話し手と聞き手のあいだで認識のずれが生じる可能性が高いからである。

3. 談話標識の連続使用

再開型話題転換や前提提示型話題転換など、同一の話題のあいだに別の話題が挿入されるような談話構成においては、話題転換表現のような談話標識が連続して使用される傾向がある。談話標識の連続使用という特徴を手がかりに、日本語母語話者と日本語非母語話者のそれぞれの場合について、(14)、(15)の2点をあきらかにした。

- (14) 連続使用されやすい談話標識のパターンや組みあわせ。
- (15) 談話標識の連続使用が出現する際の談話展開や表現効果。

3.1 日本語母語話者の談話標識の連続使用

日本語母語話者による談話標識の連続使用のなかで、結びつきが強い組みあわせのほとんどが異種併用のパターンであった。これは、「まあ、だから」など、言いよどみと接続詞類の組みあわせや、「あ、でも」など、感動詞類と接続詞類の組みあわせのように、種類の異なる談話標識の組みあわせパターンのことである。日本語母語話者による談話標識の連続使用のなかで、もっとも結びつきの強い組みあわせは「いや、でも」、次に結びつきの強い組みあわせは「あれだ、あの」であった。これらの談話標識の連続使用は、(16)、(17)のような談話展開を構成する際に効果を発揮していた。

- (16) 「いや、でも」の組みあわせは、直前の話題を否定しながら数発話前の話題内容を再提示するような談話展開に用いられやすい。
- (17) 「あれだ、あの」の組みあわせは、副次部分を導入しながら、副次部分終了後の復帰予告を行うような談話展開に用いられやすい。

3.2 日本語非母語話者の談話標識の連続使用

日本語非母語話者の場合、母語話者に比べて、談話標識が連続使用されにくかった。また、連続使用されやすい談話標識のパターンや組みあわせにも、(18)、(19)のように、違いがみられた。

- (18) 日本語非母語話者の会話においては、母語話者の会話に比べ、同語反復のパターンが多く出現している。
- (19) 日本語非母語話者の会話においては、母語話者の会話に比べ、結びつきの強い特定の談話標識の組みあわせが少ない。

この傾向から、日本語非母語話者の談話構成には、(20)のような点に問題があると考えられる。

- (20) 前提提示型話題転換のような談話展開を構成する際に、母語話者が用いる特定の組みあわせの談話標識を用いないことにより、聞き手とのあいだに認識のずれが生じる可能性がある。

次の4で、会話者参加者間に生じた認識のずれについて、実際の接触場面会話での例を提示し、この論文の意義を説明する。

4. 日本語母語話者と非母語話者のあいだに生じる認識のずれ

(21)は、日本語非母語話者による前提提示型話題転換において、話題転換表現の使用に問題があったため、聞き手とのあいだに認識のずれが生じた例で

ある。

(21) 大学の寮に住んでいる非母語話者 CG が、日本で就職が決まったため、卒業を控えて近々引っ越すという話

01JG：ここ、いつまでいらっしゃるんですか？。

02CG：うーん、えーと、引っ越しは2月、あ、3月28日、予定してます。

03JG：あ、じゃ、あと2か月ぐらいあるんですね。

04CG：うん、そうですねー。

05JG：よかった、よかった。

⇒06CG：あと、1か月間、帰国するんです。

07JG：えっ？[驚いたように]。

08CG：あの、このアマゾンの箱のなかに(うん)、えーと、あの、アマゾンでいっぱい買い物して(うんうんうん)、あの一、帰国のとき、帰省のとき、あの、プレゼントとして友だちに贈るんです。

09JG：は一は一は一は一。

→10CG：残ったのは、この箱は引っ越すのときに、使うんです。

11JG：あー、なるほどー。

(21) では、CG の引っ越しについての話題が語られており、05JG まではその時期についてのやりとりである。CG は、06CG で突然一時帰国の話題を開始している。07JG から、それが JG にとって予想外の談話展開であることがわかる。08CG によると、「箱は、国の友人に贈るプレゼントとしてアマゾンで買い物をした結果、その部屋に存在しているものだ」ということ、そのプレゼントは、「CG がこのあと一時帰国するときに友人に渡すものだ」ということがわかる。しかし、それがあきらかになっても、なぜ引っ越しの話題に続いて、それが語られたのかは、なおはっきりしない。最終的に10CGで、残った箱が引っ越しに使われるということがあきらかになり、11JGでJGも納得する。したがって、この一時帰国の話は、「部屋にあるアマゾンの箱を引っ越しに使う」という、引っ越しについての話題を継続するために必要な前提的説明として発話された前提提示型話題転換であると考えることができる。

ここで用いられた表現は「あと」という接続表現のみである。このような前提提示型話題転換のやりかたによって、聞き手が発話の流れをつかめずに戸惑っているといえる。上述の(8)や(17)から、日本語母語話者による前提提示型話題転換では、「あの」と開始の沈黙の組みあわせや、「あれだ、あの」の組みあわせが用いられやすいことがわかる。これらの表現の使用により、会話参加者間での認識のずれが生じなくなる可能性がある。

以上のように、日本語母語話者と日本語非母語話者のそれぞれの会話における話題転換および、それにかかわる談話標識の使用傾向について対比的に示すことで、日本語教育に生かすための話題転換研究の端緒となると考えられる。

学位論文審査結果の要旨

1) 研究テーマが絞り込まれている。

先述の通り、この論文の研究対象は日本語会話における話題転換であり、日本語教育に応用可能な形での実態解明を行うという点で、一貫している。日本語教育に応用可能な話題転換研究については、これまで研究量が豊富ではない。そのなかで、従来の話題分析・文章論研究などの中に、自身の研究を位置づけた。単なる会話内の話題構成の分析にとどまらず、会話参加者の視点に立って話題転換の手法を把握するというテーマのオリジナリティと有用性は十分に評価されるものであった。

2) 研究の方法論が明確である。

実際の会話資料をもとに、発話と発話のつながり方から話題転換を捉える方法論は一貫している。これによって、話題転換のタイプが「新出型」「再開型」「前提提示型」の3つに分けられ、そのタイプ別に各種表現の使用傾向を把握するという研究手法が採られている。いずれについても、日本語母語話者と非母語話者の日本語会話が分析対象となっており、研究の目的に適ったものであった。使用傾向の解明に当たっては、諸表現の出現傾向が集計され、統計的手法による検証が加えられている。研究対象と研究の目的に応じた、一貫して明確な方法論が採用されていると言える。

3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

主に第2章で、この論文の研究と従来の研究の目的の異同を踏まえたうえで、国内外の話題転換に関する先行研究に触れ、諸概念が整理されている。話題転換の分類方法、各種表現形式に関する先行研究についても、長いタイムスパンで研究の歴史が俯瞰されている。それらの知見と自身の研究の目的との相違を踏まえたうえで、様々な概念規定や方法論の選択がなされているとの評価が得られた。

4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

この研究は、話題転換の実態解明を行うものであり、結論は実態を整理した形をとる。「沈黙」を用いた話題転換については、その沈黙が当該の話題を終了させるものなのか、新しい話題に転換させるためのものなのか、という点について判断根拠をさらに明確にしていく必要性が指摘された。しかし、この点は、論文全体の評価に影響するものではなく、話題転換の実態を把握するための会話データ収集・分析の枠組み・統計的処理について大きな問題はなかった。

5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

会話行動そのものの性質を明らかにするために行われてきた話題転換研究を、言語教育に応用するという目的のもとに再構築した独創性は、高く評価されるものである。今後、会話そのものの研究と、この論文のような応用のための研究とが相互に影響を与えていくことが期待される。また、日本語学習者の会話行動に関する言語教育研究を進展させる研究としても評価された。

4 審査委員会の結論

この論文は、実態に基づいたデータ、無理のない分析方針と堅実な分析方法によって、つかみづらい会話行動の実態を、意義ある形で整理することに成功している。本審査委

員会は、全員一致で、この論文が3で記したように、人間社会学研究科言語文化学専攻の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると結論付けた。

以上